

ふちゅう でんせつ
府中の伝説



ぼたもちくわーん

ある年のお彼岸のことです。お寺に“ぼたもち”がとどけられました。和尚さんは留守でした。そこで、小僧さんはこっそり“ぼたもち”をひとつつまんで食べてみました。

「ああ、うまい。ああ、うまい。」

小僧さんは、むちゅうでぜんぶ食べてしまいました。

「さて、困った。どうしようか。」

しばらくすると、小僧さんは立ち上がって本尊さまの口のまわりに、あんこをぬりたくりました。やがて和尚さんが帰ってきました。

「おまえ、“ぼたもち”をみんな食べてしまったのか。」

「いいえ、私はいadakimaseen。きっと本尊さまが召し上がったのでしょ。う。」
と言って、小僧さんは本尊さまの口を指さしました。

「“ぼたもち”をひとりで食べてしまうなんて、ひどい本尊さまだ。よし、かまゆでにしてくれる。」

怒った和尚さんは、庭に大きなかまをすえて、本尊さまを投げ入れました。小僧さんが火をつけると、本尊さまは、「くった くった くった くった。」と、煮えはじめました。

「やっぱり本尊さまがくったんだ。」

そこで、和尚さんは本尊さまをかまから出して、ばちでなぐりました。すると、こんどは、「くわーん くわーん。」と、聞こえました。

「あ、くわなかったのですか。これは、もうしわけないことをしました。」

和尚さんは、あわてて本尊さまを元の場所におかえしました。そして、それからは、ずっと本尊さまを大切にしたということです。

たぬきのお坊さん

むかし、本町の安養寺にえらい住職がいて、全国から優秀な弟子が集まってきました。なかでもはるばる九州からやってきた若いお坊さんは毎日まじめに働き、住職はその働きぶりにいつも感心していました。

ある春の昼下がり、お坊さんは修業の疲れで居眠りをして、その時うっかりしっぽが出てしまいました。住職に正体がばれてしまったのです。

「おまえはたぬきだったのか。」

お坊さんはあわてて“しっぽ”をかくしましたが、もう間に合いません。そこで住職に向かって両手をついて言いました。

「私が人間に化けてもう三千年もたちます。幸運なことに天竺（インド）でお釈迦さまのお説教を聞くことができました。お世話になったお礼に、明日の夕ぐれに人見が原でその様子をお目にかけますのでぜひ来てください。しかし、どんなことがあっても合掌だけはしないでください。」

たぬきはすべてを住職に打ち明けると別れのあいさつをして姿を消しました。

翌日の夕ぐれ、住職は弟子たちをつれて人見が原に行きました。そこは、府中の町の北東部にあり、当時は野原でした。近くには小高い丘があり、ここ

せんげんやま
を浅間山といいます。

じゅうしょく ま
住職たちがじっと待っていると、しばらくしてせんげんやま ひか かがや
浅間山のあたりに光り輝くお
しゃか
釈迦さまがあらわれました。住職たちは目の前に仏の世界があらわれたこと
おどろ よろこ
に驚き喜んで、つい思わずがっしょう おが
合掌して拝んでしまいました。すると、たちまち
ほとけ せかい き
仏の世界は消えてしまいました。あとにはいつものふうけい
風景があるだけでした。

その後、たぬきが住職の前にあらわれることは二度とありませんでした。

はなし で
このお話に出てくるたぬきが書いたとされるもんじょ
文書が、いま あんようじ たからもの
安養寺に宝物とし
ほかん
て保管されています。

だいじゃ おみたらしの大蛇

みず あめ
水を、雨にだけたよっていたじだい はなし
時代のお話です。

ひ ふちゅう ひがしがわ ひとみむら
ある日、府中の東側、人見村のおばあさんが、たきぎ
き せんげんやま はい
たき木をとり浅間山へ入
りました。たくさんたき木を取ったので、わきみず
みず
わき水のそばでひと休みすることに
しました。そこにはおお まつ き
折れた大きな松の木がありました。

「よっこらしよ」

おばあさんがこしをおろしたとたん、その木が動き出すではありませんか。
よくみると、それはひとひとから“おみたらしのぬし”と呼ばれ、まつ
まつ
祀られているだいじゃ
大蛇
だったのです。おばあさんは、むちゅうで山をかけおり、いえ に かえ
家に逃げ帰りました。
あまりにおどろ
驚いたおばあさんは、からだ よわ ね こ
体が弱って寝込んでしまい、き どく し
気の毒にも死
んでしまいました。

この大蛇^{だいじゃ}がいたというわき水^{みず}は、どんなに日照り^{ひで}が続いてもかれたことがなく、人々^{ひとびと}は、“おみたらし”と呼んで大切に守^{まも}ってきました。

むかしは、「“おみたらし”の方^{ほう}へ行くと大蛇^{だいじゃ}が出るから遊び^{あそ}びにいくんじゃない」と言^いわれたそうですよ。

はな じぞう
鼻どり地蔵

むかし、あるお百姓^{ひゃくしょう}さんが、馬^{うま}をひいて田んぼ^{たがや}を耕^{たが}していると、とつぜん馬^{うま}があばれだして動^{うご}かなくなってしまうました。

お百姓^{ひゃくしょう}さんが困^{こま}りはてていると、そこに小僧^{こそう}さんがやってきて、馬^{うま}の鼻^{はな}をとって引^ひっぱってくれました。

すると、たちまち馬^{うま}はおとなしくなると、お百姓^{ひゃくしょう}さんはぶじに田んぼ^{たがや}を耕^{たが}し終^おえることができました。お礼^{れい}を言^いおうとふりかえると、小僧^{こそう}さんの姿^{すがた}はどこにもありませんでした。

馬^{うま}をひいての帰^{かえ}り道^{どう}、田んぼ^たから小^{ちい}さな足^{あし}あとが是政^{これまさ}の西蔵院^{さいぞういん}に向^{つづ}かって続^{つづ}いていました。ふと見^みると、お地蔵^{じぞう}さまの衣^{ころも}のすそが泥^{どろ}で汚^{よご}れていたのです。

そこでお百姓^{ひゃくしょう}さんは、あの小僧^{こそう}さんがお地蔵^{じぞう}さまだったとわかりました。

それからというもの、このあたりのお百姓^{ひゃくしょう}さんは、馬^{うま}を使う^{つか}ときには必^{かなら}ず是政^{これまさ}の西蔵院^{さいぞういん}へお参^{まい}りに行^いくようになった、ということです。

もっと知りたくなったら読む本のリスト

しよめい ほん なまえ 書名(本の名前)	ちよしゃ ほん か ひと 著者(本を書いた人)	しゅつばんねん 出版年	ほん せ 本の背ラベル
ふちゅう ふうどし だい 7ばん 府中の風土誌 第7版	ふちゅうし 府中市	1981年	F21/フ
まつはきらい	おざわとしお 小沢俊夫	1986年	F38/オ
はな じそう 鼻どり地蔵	おざわとしお 小沢俊夫	1987年	F38/オ
たぬきのお坊さん	おざわとしお 小沢俊夫	1988年	F38/オ
ふちゅう くちつた しゅう 府中の口伝え集	ふちゅうしりつつきょうどかん へん 府中市立郷土館/編	1986年	F38/フ
むさしふちゅうものがたり じょう 武蔵府中物語 上	さわたりもりあつ 猿渡盛厚	1963年	F213/10/サ
グラフ府中 だい 10ごう 第10号	ふちゅうしきかくちょうせいぶ ころほうか 府中市企画調整部広報課/ へんしゅう 編集	1975年	F318.5/10/グ
グラフ府中 だい 12ごう 第12号	ふちゅうしきかくちょうせいぶ ころほうか 府中市企画調整部広報課/ へんしゅう 編集	1976年	F318.5/10/グ
むさしふちゅう みるぞく 武蔵府中の民俗	きたのあきら 北野晃	1988年	F380/10/キ
とうきょうみんわ 東京民話	あさひしんぶんしゃしゃかい へん 朝日新聞社社会部/編	1956年	F388/00/ト
むさしの みんわ でんせつ じょう 武蔵野の民話と伝説 上	はらだしげひさ へん 原田重久/編	1976年	F388/02/△
とうきょう みんわ 東京の民話	こいけすけお 小池助男	1979年	O913/コ

さがしている本が見つからないときは、図書館の人にきいてみましょう。



「府中の伝説」こども府中はかせ No.3 2014年3月発行

府中市立図書館 編集・発行

<http://library.city.fuchu.tokyo.jp/>